

傭兵、ライオンの団長に晒しで屈する

R18

2026
・
9
・
30

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

【第1話　さらし台の釘の音】

朝から広場で釘を打つ音が響いていた。

工兵の源さんが古い木組みに新しい板を張っている。膝の高さの床と、胸の高さの手すり。この傭兵団で「さらし台」と呼ばれているものだった。

「前に使ったのは、脱走した奴のときだわな」
源さんが金づちを止めずに言った。

「裸で吊られて、夜まで泣いて、最後は小便まで漏らしとった。あれは見とれなかった」

「今度は誰を上げるんだよ」

迅は鎧の肩当てを締めながら聞いた。源さんは首を横に振った。ただ、また釘を打ち始めた。

「迅、前へ」

低い声が広場を割った。

団長の巖が列の先頭に立っていた。ライオンの獣人で、金色のたてがみが肩から背中まで波打っている。迅の頭は巖の胸の高さにしか届かない。

「前衛はお前だ。援護の足に合わせろ。突っ込みすぎるな」

「遅い奴に合わせてたら、旗は取れねえよ」

「取れなくていい。全員で帰ってこい」

「団長がそう言つて、取れた旗があつたかよ」

列の後ろで誰かが笑つた。巖は笑わなかつた。太い指で迅の肩当てをたたき、それきり背を向けた。

たたかれた肩が妙に熱かつた。

出撃の笛が鳴り、傭兵たちは北の丘へ駆け出した。補給係の透が荷車の横から手を振る。迅と同じ村から出てきた、ひよろつとした若い男だ。

「迅、無茶するなよ！」

「するに決まってるだろう」

迅は笑って、先頭を走った。



丘の上の敵陣は思ったより薄かった。

迅は剣を抜き、槍の列の隙間へ体をねじ込んだ。手前の奴を切り、次の奴の盾を蹴り飛ばす。敵の旗ざおが目の前にあった。

さおを切ると、旗が泥の上に倒れた。

「取ったぞ！」

叫んで振り返ると、後ろに誰もいなかった。

援護の列ははるか下の斜面で敵に囲まれていた。佐吉の赤い鉢巻が見えた。その横で弥平が膝をついている。

迅は斜面を駆け下りた。間に合わなかった。



夕方、団は宿営に戻った。

荷車に載せた佐吉と弥平の体に、透が布をかけている。迅はその横を通れなかった。左肩に矢が刺さったまま、広場の端に立っていた。

「迅」

巖の声でした。

「天幕に來い。矢を抜く」

「自分で抜ける」

「來い」

それ以上は言わなかった。巖が歩き出すと、迅の足は勝手についていった。

団長の天幕は獣の匂いがした。干し草と、鉄と、雄の汗の匂いだ。

「鎧を外せ」

「……いい。このまま抜いてくれ」

「矢じりが肩当ての隙間に食い込んでる。外さなきゃ抜けん」

迅は奥歯をかみ、胴の留め金を外した。肩当てが床に落ち、下のシャツが血で肌に貼りついていた。

巖の大きな手が迅の背中を押さえた。

「息を吐け」

言われた通りにした瞬間、矢が抜けた。

「ぐっ……！」

声が漏れた。膝が崩れそうになり、巖の腕が腰を支えた。

次に来たのは痛みではなかった。

ざらり、と熱い舌が傷口をなめた。

「な、にしてんだ……っ」

「ライオンは傷をなめて治す」

「俺はライオンじゃねえ……っ、やめろ、そこ……っ」

猫の舌をもっと大きく、もっと粗くしたような舌だった。傷口の血をこそげ取るたびに、背骨の奥まで震えが走る。迅は床に手をついた。

巖の鼻先が肩から首筋へ、首筋から背中へ降りていく。

「……団長、もう血は止まってるだろ」

「血の匂いの下に、別の匂いがある」

迅の体が固まった。

「前が出るたびに、この匂いが濃くなる。今日は特に濃い」

「何の、話だよ」

「入団の日から知ってた」

大きな手のひらが迅のズボンの前を布の上から押さえた。

「っ………！」

巖の手のひらの下で、隠し通してきた割れ目が熱く湿っていた。

「ちんぽの代わりに、まんこだな」

「言うな……っ！」

迅は巖の腕を振りほどこうとした。びくともしなかった。

「誰にも言ってねえんだ。透しか知らねえ。水浴びも、小便も、全部隠れてやってきた。前衛で一番切れば、誰も俺の股なんか見ね

え。そうやって、ここまで来たんだ」

「知ってる」

「知ってて、黙ってたのかよ」

「黙ってた」

巖の親指が布越しに割れ目の上を押した。小さく尖ったところを、ぐり、と潰すように。

「ひっ……!」

「このまんこが、切るたびに濡れてる。旗を取るときが一番ひどい」

「ちが……っ、ちがう、戦の熱で……っ」

「そうだな。戦の熱だ。だから、お前は一人で前に出る。後ろを見る暇がない」

巖の声が低くなった。

「佐吉と弥平は、お前の背中を追って死んだ」

迅の喉が詰まった。親指はまだ、布の上で濡れたクリをこすり続けている。佐吉の赤い鉢巻と腰の奥をかき回す熱が一緒くたになって、どれが自分の震えなのか分からなかった。

「……罰なら、殴れよ。むちでもいい」

「殴っても、お前は明日また一人で突っ込む」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ……っ」

「台に上げる」

迅の顔から血の気が引いた。

「さらし台で脱がされたら、全部ばれる」

「そうだ」

「団の全員に、見られる」

「見せる。前衛がどういう体で戦ってたか、全員に知らせる」

巖の指が離れた。ズボンの前には濡れた染みがくつきり残っていた。

「一人で前に出られなくなればいい。前に出るたびに、全員の目がお前のまんこに刺さるようになれば、お前は後ろを見る」

「……そんなの、団長の勝手な理屈だろ」

「そうだ。俺の勝手だ」

巖は立ち上がり、天幕の入り口をめくった。



点呼の鐘が鳴った。

広場に傭兵たちが集まり、たいまつが灯された。源さんの台はもう手すりまで張り終わっていた。

巖が台の前に立った。

「佐吉と弥平が死んだ。前衛が突っ込みすぎて、援護が置いていかれた」

ざわめきが広がった。迅は列の先頭で、背中に視線が集まるのを感じた。

「罰を決める。迅は明日、さらし台に上げる」

「おいおい、前衛様がさらし台かよ！」

イノシシの獣人の猪助が、手をたたいて笑った。

「脱がすのか、団長？あの生意気な前衛様の、ちんぽの大きさでも見てやるか！」

笑い声が上がった。迅は拳を握った。爪が手のひらに食い込んだ。

巖が源さんの道具箱から白墨を取り、台の手すりに太い字で書いた。

迅、と。

それから迅の頭に手を置いた。重く、大きな手だった。

「今日さらすのは名前だけだ。体は明日、全部さらす」

第02話

【第2話 全員の目の前で】

夜更けに天幕の入り口がそつとめくれた。

「迅、起きてる？」

透だった。背中に荷をしょっている。干し肉と水筒と、迅の着替えまで詰め込んだ荷だった。

「村に帰ろう。見張りの交代まで、まだ間がある」

「……何言ってるんだ、お前」

「台に上がったら、脱がされるんだよ。あんたの体、団の全員に見られる」

透は声をひそめたまま、迅の腕をつかんだ。

「僕、ずっと見張ってきたじゃないか。水浴びのときも、あんたが小便するときも。あんたが隠したいって言うから、僕はずっと」

「分かってる」

「だったら来てよ。団長がどうして急にこんなことするのか知らないけど、まともじゃないよ」

迅は答えなかった。

団長の天幕でなめられた感触が、まだ肩に残っていた。布越しにクリを潰された親指の重さも、腰の奥に残っていた。思い出したただけで、ズボンの中がぬるりと湿った。

透に気づかれないように、迅は膝を閉じた。

「逃げたら、佐吉と弥平の前から逃げたことになる」

「死んだ人は、あんたが逃げても怒らないよ」

「俺が怒るんだよ」

透の手が迅の腕から離れた。

「……朝になっても、僕はまだ荷を解かないからね」

透は天幕を出ていった。迅は横になり、目を閉じた。眠れるはずもなかった。



朝の広場には団の全員が集まっていた。

見張り番まで持ち場を離れてきている。源さんが台の下で腕を組み、猪助は一番前に陣取っていた。透は荷車の陰から青い顔でこちらを見ていた。

巖が迅の首の後ろをつかんだ。子猫を運ぶ親猫のようなつかみ方だった。そのまま階段を上がらされる。

台の上に立つと、広場の全員の顔が見下ろせた。

「脱げ」

巖が言った。

「……自分でか」

「自分でだ。胴から脱げ」

迅は胴鎧の留め金を外した。肩当てを外し、鎧を足元に置く。シヤツを脱ぐと、包帯を巻いた肩と、胸板が朝の光にさらされた。

「ほう、いい体してんじゃねえか！」

猪助が口笛を吹いた。

「下もだ」

巖の声は変わらなかった。

迅は腰の革帯に手をかけた。指が動かなかった。

「……団長」

「どうした」

「頼む。下は、団長だけに」

「駄目だ」

獣の太い指が迅の手の上から革帯をつかんだ。留め金が外れ、ズボンが下着ごと引き下ろされて、足首から抜き取られた。

広場が静かになった。

最初に声を上げたのは猪助だった。

「……おい。ちんぽがねえぞ」

ざわめきが波のように広がった。

「なんだありゃ」

「まんこじゃねえか？」

「前衛様、女だったのかよ！」

「女じゃねえ！」

迅は叫んだ。声が裏返った。

「女じゃねえよ、俺は……っ！」

「女じゃない」

巖が迅の後ろに立ち、広場に向かって言った。

「こいつは男のカントボーイだ。男の体に、へその下だけまんこが付いてる。そういう体で、ずっと前衛をやってた」

巖は迅の両手首を手すりに縛りつけた。縄が肌に食い込む。次に足首を片方ずつ、台の両端のくいへ。

脚が大きく開かれた。股の割れ目が広場の全員に向かって丸見えになった。

「見るな……っ、見るなよ……っ！」

「見ろ」

巖の太い指が割れ目を左右に広げた。

「もう濡れてる」

「うそだろ、糸引いてやがる」

「さらされて濡らしてんのか、前衛様はよ」

猪助の音が一番大きかった。迅は横を向いた。向いた先にも、傭兵たちの目があった。

「ちがう……っ、昨日から、ずっと、団長が……っ」

「俺が何だ」

「団長が、触ったから……っ」

言ってしまったから迅は唇をかんだ。広場がどよめいた。

巖が台の上に膝をついた。たてがみが迅の太ももに触れた。

「な、にを……」

答えの代わりにあのざらついた舌が、割れ目を下から上へなめ上げた。

「ひいっ……っ！」

腰が跳ねた。縄が手すりをきしませた。

「あ、あ……っ、やめ、団長、それ、やめろ……っ！」

猫よりずっと粗い舌がまん汁ごと割れ目をこそげる。舌先がクリに引っかかるたび、頭の中で火花が散った。

「ひっ、あっ、ああっ、ざらざら、する……っ、そこ、こすんな……っ！」

「こいつ、団長の舌で腰振ってやがる」

「前衛様の声、聞いたことねえ声だな」

巖は顔を上げない。じゅるじゅると音を立てて吸い、クリを舌の腹で押し潰した。

「んぐっ、う、ううつ、団長、団長っ、見られてる、見られてんだ
って……っ！」

「見られてるから、こんなに出てる」

巖がまんこから口を離した。口の周りの毛が迅のまん汁で濡れて光っていた。

「前に出るときと同じだ。見られるほど、お前のまんこは濡れる」

「ちが、ちがう……っ」

舌がまた戻ってきた。今度はクリだけを、ざり、ざり、としつくこする。

腰の奥で、何かがせり上がってきた。止められなかった。

「だめ、だめだ、何か、くる、出る……っ、見んな、見んなあ
っ……！」

びくん、と体が弓なりに反った。

割れ目から透明なしぶきが噴き出した。台の板を濡らし、手すりの下から広場の土まで飛んだ。

「うおっ、噴いた！」

「潮まで噴きやがった！」

笑い声と口笛が広場を埋めた。迅は縄に吊られたまま、腰をびくびく震わせていた。

「はっ、はあっ……っ、あ……っ」

巖が立ち上がった。ズボンの前がはち切れそうに盛り上がった。迅の手首ほどもありそうな太さが、布の上からでも分かった。

「ちんぽは夕方だ」

「……は……？」

「それまで、このまま吊っておく」

巖は手すりの縄を確かめ、階段を降りていった。

「全員、持ち場に戻れ。見たい奴は、通るたびに見ていけ」

◆
昼を過ぎても、迅は台の上にいた。

水くみに行く者も、見張りの交代に向かう者も。広場を横切る傭兵たちは、みんな台を見上げていった。

「まだ濡れてんぞ」

「乾く暇がねえんだろ」

脚を閉じようとしても、足首の縄が許さない。風が割れ目をなでるたびに、奥がひくついた。見られていると思うと、また濡れた。

日が傾き始めたころ、台の階段がきしんだ。

透だった。水の入った器を持っていた。

「飲んで」

迅は器に口をつけた。水が喉を流れていく。透は迅のまんこを見ないように、ずっとよそを向いていた。

「迅」

透がふところから小刀を出した。

「今なら、見張りもない。縄を切れる」

迅は透の手元を見た。刃に夕日が映っている。

腰の奥がまたひくりと動いた。ちんぽは夕方だ、と巖は言った。

「……切るな」

「迅」

「切るなよ、透」

透の手が止まる。小刀がふところに戻っていった。
広場の向こうで、たいまつに火が入った。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 傭兵、ライオンの団長に晒しで屈する

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・30

レーティング R18